

Love Bombing Society

—匿名のアート作品の分析と考察—

富山大学芸術文化学部 デザインコース

田中 海里

要旨

本調査は、匿名の映像作品《Love Bombing Society》を対象とし、その構造と表現を分析するアーカイヴァル・リサーチである。マルセル・モースの贈与論およびJ.L.オースティンの言語行為論を参照し、映像内の反復的なイメージや表現を分析することで、制作者の寓意を考察した。

【序論】

本調査は、完成された作品や明確な作者像を前提とするものではなく、既存の資料や痕跡を保存・収集することを目的としたアーカイブでもない。むしろ、意味が定まらないまま都市空間に存在していた事物を、記述と分析によって一時的に固定し、再配置する行為そのものを調査の方法として位置づける点に特徴があるⁱ。

都市空間には、落書きやステッカーなど、発話主体や意図が明示されない痕跡が多く存在する。これらはしばしば匿名性を前提とし、誰に向かられたものが曖昧なまま受容される。本調査が注目するのは、こうした匿名的痕跡の中でも、本来は語り手と受け手の関係が前提とされるはずの肯定的な言葉が、主体不明のまま都市空間に配置されているという点である。

これがどのような条件のもとで受容され、いかなる解釈を誘発しうるのか。本調査は、当該事例を対象に、確認可能な行為と構造を記述することで、その成立条件を検討する。

第1章：調査の発端

1.1 路上における紙片の拾得

起点は、2025年9月26日深夜、新宿区歌舞伎町一丁目付近で拾得した紙片である（写真1）。紙片はポストカード大（約100mm×148mm）で、表面中央に「あなたは愛されている」という言葉が黒色のゴシック体で印字されていた。

同日、同一の紙片を計3枚確認した。いずれも路上のゴミ箱付近、自動販売機の取り口、パチンコ店内の筐体横などに置かれていたが、その多くは既に廃棄物と混在した状態にあった。特にゴミ箱周辺に位置していた点は、偶然とは考えにくい配置傾向を示していた。



拾得当初、筆者はこれを遺失物あるいは宣伝物の一種として暫定的に捉えた。しかし、文面の単純さと出所の不明确さが、強い違和感として残った。

紙片は提示されているというよりも、都市の廃棄系に組み込まれているように見えた。この印象が、本調査の出発点となった。

写真1 拾得した紙片

1.2 映像作品の発見経緯

紙片裏面には URL (www.lovebombingsociety.com) が印字されていた。URL 以外に、意図や背景を説明する情報（概要、連絡先、署名等）は確認できなかった。

当該 URL ハーアクセスしたところ、「Love Bombing Society」という名称とともに一本の映像が提示されていた。サイトには解説文や団体概要は存在せず、映像のみが配置されている。映像の内容は、一人称視点で都市空間を歩行しながら紙片を処理する行為を記録したものである。ただしそれは配布や掲示というよりも、主としてゴミ箱へ紙片を投棄する場面の反復によって構成されていた。

ここで確認できるのは、「肯定の言葉」が都市に広がっていく過程ではなく、むしろ都市の処理系へ吸収されていく過程である。本調査は、この廃棄の反復という構造を中心に、映像の形式と意味を記述することを目的とする。

第2章：調査対象の設定と方法

2.1 分析手法

本調査は、作者の経験や動機の推定によって作品を説明する方法を取りない。制作者が匿名性を貫いている以上、内面や動機の断定は恣意的になりやすいからである。したがって、本報告では映像内に確認できる行為・配置傾向・編集構造を記述の起点とし、意味や効果は観察可能な要素から導かれる範囲で検討する。

ただし、本映像を調査対象として選定した契機は、初見時に抱いた強い違和感にある。肯定の言葉が他者に向けて提示されるのではなく、繰り返し廃棄されるという構造は、本来関係性を前提とするはずの言語行為を断絶しているように見えた。この違和感は一過性の印象に留まらず、映像を反復視聴する動機となった。

筆者は映像を複数回視聴し、各カットの位置関係、廃棄行為の頻度、終盤への推移を記録した。本調査は、その反復視聴と記録の過程を通じて構築されている。

分析手法は次の三点に整理できる。

1. 意図の遮断：作者の心理や動機を断定せず、観察可能な事実から構造を組み立てる。
2. 廃棄構造の記述：紙片が提示されるのではなく処理される過程に着目し、都市空間の循環装置との関係を整理する。
3. 固着を含むアーカイブ化：対象への反復的注視を通じて、消失を前提とする行為を記録へ転換する。

以上のことにより、本調査は匿名性と廃棄の反復という構造を中心に、映像の輪郭を明らかにすることを目的とする。

第3章：映像作品の構成要素とその分析

3.1 一人称視点（POV）がもたらす効果

映像は全編がウェアラブルカメラによる一人称視点で構成されている。音声は排除され、行為者の顔や身体的特徴は映し出されない。画面に映るのは主に手元と都市の断片であり、視線は他者との接触を避けるように限定されている。

この構成により、行為は対人的なコミュニケーションとして提示されない。むしろ都市の装置に対する処理行為として提示される。視点は常に前方と手元に固定され、他者の反応や受容は映像から排除されている。ここでは「誰に向かっているか」ではなく、「どこに処理されるか」が問題化されている。この点で、本映像は肯定の伝達を描くものではなく、肯定の行き場のなさを描く構造を持つ。

3.2 廃棄の反復と都市の処理構造

本映像の編集は、紙片をゴミ箱へ投棄する行為を中心に反復される。ジャンプカットによって個別の出来事は連續性を失い、廃棄行為は一定の手順として提示される。そこには偶発性よりも儀式性に近いリズムが存在する。

特筆すべきは、紙片が「読まれる場」に留まるのではなく、主として廃棄物と接触する空間へ移動していく点である。ゴミ箱は、都市空間において物の流通を終わらせる装置である。そこに肯定の言葉が投入されることで、言語は関係性を結ぶ契機を持たないまま、循環から切り離される。

廃棄は単なる背景ではなく、映像の中心的な構造である。紙片は提示された直後に処理される。言葉は到達よりも消去へと向かう。この反復は、肯定の過剰な提示を逆説的に示す。すなわち、肯定は他者に向けられるのではなく、都市に過剰に供給され、処理され続ける。

最終カットでは、ゴミ袋の上に置かれた紙片が映される。そこでは肯定の言葉は廃棄物と同一の平面に置かれ、意味の特権性を失う。善意の語彙は、他の不要物と区別されない。この構図は、言葉が関係性を生成する以前に消費される可能性を示唆している。

ここで生じる非対称性は、受け手と発話者の関係ではなく、処理する側と処理される言葉の関係である。肯定は守られず、保存されず、ただ処理される。廃棄の反復は、善意の過剰な供給が関係性を生成するどころか、その成立条件を奪いうることを可視化している。

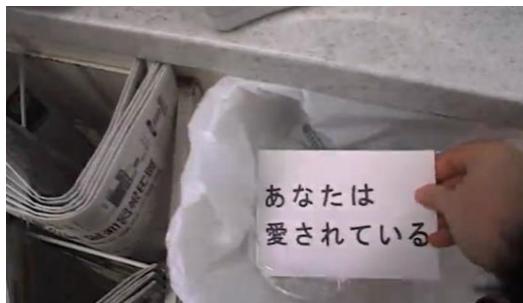


写真 2 紙片を配置している様子



写真 3 街中を映すシーン

第4章：「Love Bombing」の宗教的外形

4.1 キリスト教的布教活動としての外形

前章で確認したように、本映像は廃棄の反復を中心構造としている。しかし、本活動は一見すると、紙片に記された肯定の言葉を公共空間へ流通させるという点において、宗教的布教活動（伝道）の外形を想起させる。特に、日本の都市空間において「あなたは愛されている」というフレーズは、宗教的語彙として受け取られる可能性を持つ。理由は二つある。第一に、当該言葉が無条件の肯定（救済）を主題としている点である。第二に、その肯定が発話主体を明示しない形式をとっている点である。

キリスト教において、救済の語りはしばしば「あなたは（神に）愛されている」という形式を取る。ここで語られる愛は、個人的好意や評価ではなく、人間の行為や功績に先立って与えられる無条件の愛、すなわちアガペーとして理解されてきた。

たとえば『ヨハネの手紙一』では、愛の主体が人間ではなく神にあることが明確に示されている。

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、御子を罪の贖いの供え物としてお遣わしになりました。ここに愛があります。」

（ヨハネの手紙一 4章10節）

また、『ローマの信徒への手紙』では、人間の状態や価値判断とは無関係に、愛が先行して与えられる構造が強調されている。

「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されました。」

（ローマの信徒への手紙 5章8節）

これらの聖句に示されるように、キリスト教的救済の語りにおいては、「誰が愛しているのか」を明示せずとも、愛の主体は神であることが前提とされる。そのため、「あなたは愛されている」という言葉は、発話主体が欠落している場合であっても、宗教的主体を暗黙のうちに想起させうる構造を持つ。

しかし本作において決定的なのは、この言葉が布教的に配布されるのではなく、繰り返し廃棄される点である。布教行為は通常、言葉が誰かに届き、関係を開始することを前提とする。街頭でのトラクト配布や掲示は、受容と応答の可能性を開く実践である。

一方で本映像では、肯定の言葉は主として都市の処理装置へと投入される。そこでは受容の回路が開かれない。言葉は読まれる前に消去へ向かう。この構造において、本活動は布教の形式を参照しつつも、その成立条件を欠いている。

したがって本作は、宗教的外形をまといながらも、救済の語りを成立させない。愛は提示されるが、到達しない。布教の形式は反復されるが、関係は開始されない。ここにおいて宗教的外形は、信仰の提示ではなく、救済の不在を可視化する枠組みとして機能している。

4.2 布教として成立しない点

マルセル・モースは『贈与論』において、贈与を単なる物の移動ではなく、社会的関係を生成する行為として捉えた。贈与は受け取られ、返礼されることによって往復運動を生み出し、その循環が共同体を形成するⁱⁱ。肯定の言葉もまた、一種の象徴的贈与とみなすことができる。それは受け手に対し価値や承認を与える行為であり、通常であれば感謝、応答、あるいは内面的受容といったかたちで何らかの反応を引き起こす可能性を持つ。

しかし本作において、肯定の言葉は返礼の回路に乗らない。紙片は主としてゴミ箱へ投棄され、都市の処理系へと吸収される。そこでは「受け取る主体」が想定されない。贈与は往復を開始する以前に断たれている。この点で本作は、贈与の過剰な提示というよりも、贈与の未成立を反復している。言葉は供給されるが、関係へと転換されない。肯定は存在するが、誰かに帰属しない。

モースが指摘した贈与の本質が関係生成にあるとすれば、本作はその条件を意図的に外していると読める。贈与が返礼を伴わないとき、それは支配へ傾く可能性を持つ。しかし本作では、その支配は完成しない。肯定は他者を拘束する前に廃棄される。その未完の状態こそが、過剰な提示が孕む非対称性を露出させている。

4.4 タイトルとの接続

活動名「Love Bombing Society」は、外形上の布教らしさと矛盾なく結びつく。Love Bombing とは本来、過剰な肯定の供給によって相手の判断や関係性を左右しうる手つきを指す語として流通している。宗教的布教もまた、善意・救済・共同体という肯定的資源を用い、受け手の生活や価値観に介入しうる。その意味で、Love Bombing という語が含む

「肯定の過剰供給」「倫理的に拒否しにくい圧」を、伝道の形式に重ね合わせることが可能である。

ただし本活動は、キリスト教の伝道が通常持つ出口（祈り・教会・教義）を提示しない。むしろ「愛の言葉だけが残り、救済の主体が欠落する」という形で、布教の形式が空洞化した状態を都市に生成している。ここにおいて Love Bombing Society というタイトルは、宗教的救済の語彙が持つ肯定性を借りながら、それが制度や主体から切断されたときに生じる不穏さ一すなわち、善意が善意のまま成立しない条件一を照射する標識として機能している。

第5章 遂行的発話としての肯定

5.1 発話は行為たりうるか

J.L.オースティンは、言葉には單なる記述ではなく、発話そのものが行為となる場合があることを指摘したⁱⁱⁱ。たとえば「約束する」「宣言する」といった発話は、それ自体がある状態を成立させる。「あなたは愛されている」という言葉も、一見すると遂行的発話に近い構造を持つ。それは受け手を「愛されている存在」として位置づけ、その状態を仮に成立させる力を帯びているように見える。

しかし、オースティンが強調したように、遂行が成立するためには一定の条件が必要である。誰が語っているのか、その発話がどの制度や関係のもとでなされているのかが明確でなければならない。本作においては、その条件が意図的に欠落している。発話主体は不在であり、関係性も提示されない。言葉はゴミ箱へと投棄され、誰にも向けられないまま残される。

その結果、「あなたは愛されている」という文は、遂行的発話としての条件を満たしきらない。発話主体が明示されず、制度的文脈も提示されない以上、言葉は状態を確定的に成立させることができない。言葉は宙吊りとなり、行為へと完全には転化しない。

第6章：調査の総括

6.1 なぜこの映像を調査し続けたのか

本稿は、匿名の映像作品に対する観測記録である。しかし同時に、この観測が長期にわたり継続された事実自体もまた、本事例の構造の一部である。

映像内で反復されるのは、「あなたは愛されている」という言葉をゴミ箱へ投棄する行為である。そこでは肯定は誰にも届かず、贈与は成立せず、遂行も完遂しない。にもかかわらず、その反復は止まらない。本調査もまた、それに似た反復を含んでいる。成立しない発話を、成立しない贈与を、繰り返し記述し続けるという行為である。意味が確定しな

いにもかかわらず、観測は持続する。

この持続は、対象が持つ未完性に由来する。Love Bombing Society は、意味を提示せず、主体を提示せず、結論を提示しない。ゆえに、調査は確定的な結論へ収束しない

6.2 未遂としての作品

本稿の分析を通じて確認されたのは、「愛」や「善意」といった語が都市空間に投棄されるとき、それが必ずしも関係や救済を生成しないという条件である。本作は、愛を与えることにも、布教することにも、救済することにも成功していない。むしろ、それらが成立しない状況を反復的に提示している。

その意味で、《Love Bombing Society》は、肯定の暴力を描いた作品というよりも、肯定の未遂を提示する装置として理解できる。本稿はその全体像を解明するものではない。ただし確かなのは、本作が「成立しないまま反復される言葉」という形式を通じて、関係や信仰や贈与の前提条件を静かに露出させている点である。

ⁱ 山峰潤也「アーカイブ的芸術：混沌とした時代の作法」金沢21世紀美術館

URL : <https://www.kanazawa21.jp/tmpImages/videoFiles/file-52-7-file-6.pdf> (最終閲覧日 : 2026年1月15日)

ⁱⁱ 森山工『贈与と聖物——マルセル・モース『贈与論』とマダガスカルの社会的実践』

東京大学出版会、2021年8月31日。

ⁱⁱⁱ オースティン, J.L.『言語と行為』坂本百大 訳 大修館書店、1985年4月10日。

参考資料

黒田亘『行為と規範』勁草書房、2006年9月5日。

新共同訳聖書編集委員会 編『聖書 新共同訳』日本聖書協会、1987年。